

『季刊民族学』 新刊のご案内 5月中旬取次搬入予定



ラテンアメリカ文学「聖地」の旅、 魔術的リアリズムを超えて。

1960～70年代に世界的ブームとなったラテンアメリカ文学。近年ガルシア・マルケス著『百年の孤独』の文庫化・映像化が話題となり、現代作家の邦訳作品が次々と出版されるなど、新たな読者を獲得しつつあります。

本特集ではメキシコ、チリ、アルゼンチン、ウルグアイの作家をとりあげ、各作家の代表作とその背景を、それぞれの国の歴史や文化を交えながら紹介。研究者みずからが実際に作品の舞台となった地を訪ね、作家の足跡をたどります。

土着的・魔術的といった従来のイメージから離れた、多様なラテンアメリカ文学の魅力に迫る旅に同行してみませんか。

特集 フィールドで読み解くラテンアメリカ文学

A4判・104頁 ISBN978-4-915606-99-1 C0490 定価 2,750円（本体価格 2,500円＋税）

【特集記事】安保寛尚「マコンドからマッコンドへ：僕たちの『聖地巡礼』」「マリオ・ベネデッティの『束の間の』と49歳の秘めごと」、藤井健太郎「澄みわたる大地を歩く：カルロス・フエンテスとメキシコシティ」、仁平ふくみ「『ここ』と『どこか』が共存する都市：メキシコ モンテレイの現代文学」、鋤柄史子「ミケル・ルイスが書くチャムラの現実」、安原瑛治「サンティアゴ・デ・チレ、詩人たちのタペストリー」、新谷和輝「かなしみの街：アレハンドロ・サンブラが書くサンティアゴ」、山田美雪「コロネル・バジェホスへの帰還：マヌエル・プイグの作品舞台を歩く」、山田弦「倒木もまた、森なのだ：あわいに根を張る日系作家アレハンドラ・カミヤとブエノスアイレス」、棚瀬あずさ「ラプラタの河口の〈展望塔〉で：フリオ・エレラ=イ=レイシグ」、南映子「クリスティーナ・ペリ=ロッシの『従わない娘』とウルグアイの記憶」

【連載】野僧記（第5回）川瀬慈「園舎から縁舎へ：記憶の断片と、国境を越える祈り」

【講演録】日本万国博覧会記念公園シンポジウム 2025「新たなレガシー：2025年大阪・関西万博を後世へ」

吉田憲司、中島さち子、岩田泰、永山祐子、佐野真由子、關雄二、中牧弘允

■注文締切日：4月22日 取次：トーハン（注文扱い返条付き）5月中旬搬入予定

書籍注文 番線印	品名	価格(税込)/冊	ご注文冊数
	『季刊民族学』196号「フィールドで読み解くラテンアメリカ文学」 ISBN978-4-915606-99-1 C0490	2,750円	
	『季刊民族学』195号「みやげもの：旅するモノがもつ力」 ISBN978-4-915606-33-5 C0439	2,750円	
	『季刊民族学』194号「海と河川をめぐるグローバルヒストリー：人・ものの往来と文化創発」 ISBN978-4-915606-97-7 C0421	2,750円	
	『季刊民族学』193号「南方戦線の戦後誌：人びとの経験の多様性から」 ISBN978-4-915606-96-0 C0439	2,750円	